

平成21年12月

## 中小企業の社長は元気が張っている

毎年12月10日が近づくと中小企業の経営者は憂うつになります。公務員や大企業の冬の賞与支給額予想が報道されるからです。東京都の職員は不況でも平均100万円を超えるのではないのでしょうか。大企業では15~16%下がっても70万円を超えています。中小企業の調査でも40万円を超えています。何故このような結果になるかといえは、大企業は150社位の日本を代表する優良企業のみ情報だからです。上場企業約4,000社の平均をとるともっと低いはず。中小企業ではアンケートを集計して調査します。回収率は20%以下です。どういふ会社が回答するか想像してみてください。業績のよい会社が賞与の支給額が高い会社です。中小企業といっても社員100人以上の中会社です。平均勤続年数は16~18年と長く働いています。多くの中小企業の勤続年数は10年以下であり平均年齢も30歳代です。マスコジの報道している会社と元々中小企業では規模も平均勤続年数も平均年齢も全く違っているのに多くの社員が自分の賞与と報道される賞与を比較して寂しい思いをしています。古田土会計では社員が賞与が出ることに感謝してくれています。年末調整を委託しているので中小企業の実態を実感しているからです。500社超の530弱の企業が賞与がなく、今年の夏は平均支給額は23万円でした。平均社員数26名です。今年の冬は20万円位に落ちたのではないのでしょうか。大企業の社長は会社が赤字でも自分の給与はほとんど下げません。銀行借入の保証もしません。会社がつぶれても個人財産は守られます。ところが中小企業は業績が悪くて赤字でも借金にまで賞与を支払っている会社があります。その賞与が少ないと社員が文句を言われています。また少ない額であることが社員に申し訳ないとして謝罪している社長もいます。個人保証や自宅を担保にまで借金して社員に給与や賞与を支払っている社長の姿を見て、自分もその立場に立たせ同じようにするだろうかと立派なことだと思ったり。他の役員や社員とそんなに報酬に差があるわけでもないのに差の青です。そんな社長の気持ちには、役員や社員はなかなかわかってくれません。赤字でも中小企業はつぶれるのがあたりまえです。つぶれない会社にするためには社員には想像もできない苦勞があるのに、それを口に出すと器が小さいと思われるので誰にも話さず我慢します。社員が社長に落ち込む人もいます。社長に落ちると個人保証、担保提供による資金調達がしなげればないので全財産がなくなることもあります。そんな立場に理解する奥さんがいるのでしょうか。普通の人には引き受けられないと思います。役員まで社長に落ち込んで批判を受けられないほうが得です。いつつぶれるかわからない中小企業の社長は人生の傷業を

しているようなものです。乗り越える(ありません)。社員の才、役員の方にもこのことを私理解してほしいと思っています。このような厳しい経営環境の中で会社も存続させるためには全社員の協力が必要です。お互いに不満を持つのではなく、現実をしっかりと説明してお互いに感謝する。「こんな厳しい会社で働いてくれている社員に感謝する」「こんなに苦しいのに毎月給与や少ないながらも賞与を出してくれる会社はありがたい。給与や賞与が出ることはあたりまえではない」と感謝する。社長は大事な社員を守るために社員の3倍は働く。また本業が悪くなったときは多角化は(ない)総合化をする。本業を中心に深掘りする。多角化は失敗すると会社自体の命とになります。